

藤並の森

Vol.70



▲北海道伊達市近郊に構えた山荘の書斎にて

リレー随筆

宮尾登美子さんの思い出——加賀乙彦

二〇一五年一月八日、宮尾登美子さんが前年の十一月三十日に亡くなつたと報じられてから、数通の追悼文を書いた。それから今日で半年が経つたが、そのときの衝撃はまだとれない。親しく付き合っていた友人がもういない。という心の穴はひろがるばかりだ。

宮尾さんに初めて出会つたのは『権』が筑摩書房の大賞を受けた授賞式のことだった。日記を調べてみると、一九七三年六月二十一日とある。もう四十年余の昔のことだ。白井吉見、加藤周一など私にとっては雲の上の方々が選考委員をしておられた。それも今は昔である。私は受賞作を読んで感心していたので、作者に言葉をかけてみた。義理の母親が風呂場で娘の髪を洗つている場面が素晴らしいと告げたと、日記にはあつた。

しばらくして、宮尾さんから電話があり、お礼を言われた。それが電話付き合いの最初である。銀座の料亭で食事という誘いの電話がよくあつた。講演を高知で依頼もあつて、その地で高知新聞の記者が二人も案内係をつとめてくれ、市内はもちろん桂浜から四万十川まで連れてってくれた。それがいつのことであったか、日記を探すのだが、まだ特定できないでいる。宮尾さんが故郷を愛していることが、私に伝わってくる素晴らしい旅であった。

宮尾さんの作品には、刻苦して成功する女性の造形

が素晴らしいが、自分を見つめ、故郷への愛情に満ちた作品も私は好きだ。『権』『寒椿』『春燈』『岩伍覚え書き』『朱夏』『仁淀川』の六作には、故郷への熱い思いが込められていて、しみじみといい。

ここで宮尾さんの晩年を思い出す。一九九九年に北海道有珠郡壮瞥町に書斎を移した。『宮尾本平家物語』を書くためである。書き終えると、独立市の自宅にもどり、今度は軽井沢に別荘を建てた。私の友人が別荘を売りたいと言うので、宮尾さんに連絡すると、二つ返事で買うことが決まった。東京と軽井沢での生活を楽しんでいるので、私は安心して御付き合いを続けた。軽井沢では夏に一、二回は招待され御馳走になつた。

二〇一一年四月、『錦』が親鸞賞を受けたお祝いに、私は高知県立文学館で、宮尾文学を含めて長編小説について講演をした。しかし高知で会いましょうと約束した宮尾さんは現れず、ちょっと不審に思つた。このころから、宮尾さんは病気がちになつていたのだと今は察している。その時文学館の前に建つマンションが宮尾さんの新居である、お城の天守閣が見られる豪華な部屋だと知らされた。

ああ、このあと宮尾登美子さんとの連絡がとれないと、二〇一四年十二月の永眠となつてしまつた。

(作家)

展覧
紹介
Exhibition

宮尾登美子追悼展

ありがとう。～88年の生涯を偲んで～

宮尾登美子さん

平成27年
9月19日(土)

11月23日(月・祝)
企画展示室

観覧料500円

第一部 宮尾文学の魅力

ここでは、宮尾文学の小説を分類し、その魅力をご紹介します。

2014(平成26)年12月30日、作家の宮尾登美子さんが88歳で亡くなりました。

高知県立文学館は、生前、宮尾登美子さんから原稿をはじめとする貴重な資料の数々を寄贈頂いており、右記の期間、宮尾さんの88年の生涯を偲んで追悼展を開催いたします。

宮尾登美子さんは、日本の伝統文化や歴史上の女性たちの生き様とその生涯をテーマに数々の名作を執筆され、多くの人々に感動と勇気を与えてくださいました。

そして、故郷高知を愛し『櫂』『春燈』『朱夏』『仁淀川』といった自伝四部作をはじめ、女流文学賞を受賞した『寒椿』、直木賞を受賞した『一絃の琴』、特に映画において「なめたらいかんぜよ」という氣づ風のよい台詞で人気を博した『鬼龍院花子の生涯』など数多くの作品を通して、高知の魅力を全国に紹介してくださいました。

展覧会は、宮尾登美子さんに感謝の気持ちを込めて「ありがとうございます。宮尾登美子さん～88年の生涯を偲んで～」と名付けました。文学館では、宮尾文学の集大成と位置づけて、宮尾登美子の人と文学をご紹介します。

◆写真提供／世界文化社



▲宮尾さんが編集、執筆した「草の実」。
吾川郡保母会報誌 第1号 昭和30年1月

展示構成

第一部 愛おしき88年的人生

宮尾登美子さん88年の生涯を写真などで辿ります。

当館は、宮尾さんから1万枚を超える写真を寄贈いただいており、その中からピックアップした思い出の写真の数々をご紹介します。

また、加賀乙彦、山本一力、檀ふみといった方々からいただいた宮尾さんへのメッセージや著名人からの書簡などもご紹介します。

四、宮尾さんによって創り出された架空の主人公烈や珠子が活躍する『藏』『天涯の花』の紹介。

そして、エッセイの数々の紹介。宮尾文学の魅力を文章や資料で辿ります。

第三部 映像化・舞台化された宮尾作品

宮尾作品における、小説のほとんどは映像化、舞台化されており、今回の展示では、これらの作品群を写真などとともにダイジェストでご紹介します。

会
見
展
覽
紹
介
Exhibition

ありがとう。宮尾登美子さん

～88年の生涯を偲んで～

平成27年
9月19日(土)

▼
11月23日(月・祝)
企画展示室

観覧料500円

■展示解説

展覧会担当者による展示解説です。

会期中
毎週土曜日
午後1時半～
(約20分程度)

参加費: **要当日観覧券**
申込: 不要。
直接会場にお越しください。



自伝四部作より抜粋した文章をもとに、写真と地図でゆかりの地をご紹介します。是非、多くの皆様にお越しいただければと願っています。

(学芸課長／津田加須子)

第四部 宮尾登美子さんゆかりの地を訪ねる
「文学散歩」

◆関連企画のご案内◆

■記念対談 「作家 宮尾登美子さんの魅力」

女優の檀ふみさんと作家の山本一力さんによる対談、宮尾登美子さんの魅力や思い出などを語っていただきます。そして檀さんが宮尾作品の朗読をしてくださる予定です。

- ・日 時：10月12日(月・祝) 午後2時～3時30分(予定)
- ・場 所：高新RKCホール(高知新聞放送会館 西館6階) ※開場は午後1時～
- ・対 談：檀ふみさん(女優) × 山本一力さん(作家)
- ・定 員：675名
- ・参加費：参加には**当日券1,000円(観覧券含む)** もしくは **前売券800円(観覧券含む)** が必要です。

※前売り券は下記でお買い求めください。(販売期間：平成27年8月1日～10月11日)

入場券(このチケットで宮尾展覧会もご覧いただけます。) 1000円が2割引の800円でお買い求めになれます。

高知県立美術館ミュージアムショップ、金高堂本店・朝倉ブックセンター、宮脇書店イオンモール高知店、

高新プレイガイド、高知市文化プラザかるばー(高知市文化プラザミュージアムショップ)、

高知大丸プレイガイド、高知県庁生協売店、高知県立県民文化ホール、高知県立文学館。

■文学講座 「ありがとう。宮尾登美子さん～88年の生涯を偲んで～」1、2、3

9月～11月までの第3日曜日に、3回連続講座を開催します。

- ・日 時：9月20日(日・祝)、10月18日(日)、11月15日(日)
各日とも午後2時～午後3時30分

・場 所：高知県立文学館 1階ホール(開場は午後1時30分～)

・講 師：高知県立文学館学芸課長／津田加須子

・定 員：50名(電話又は文学館受付にて事前にお申し込みください。)

・参加費：**要観覧券(1枚の観覧券で講座3回通してご利用いただけます。)**



■文学散歩 宮尾文学ゆかりの地を訪ねます。

お気軽コースもございますので、詳細はお問い合わせください。

☆文学散歩 春野コース☆

- ・日 時：9月27日(日)、10月26日(月)
各日とも
午前9時30分～午後4時30分
- ・場 所：春野周辺(自伝4部作ゆかりの地)
- ・定 員：各日とも30名
(電話又は文学館受付にて事前に
お申し込みください。)
- ・参加費：**2,000円(昼食代含)と
実費(バス代1,320円程度)**

☆文学散歩と得月楼での昼食と朗読会 (宮尾登美子生誕の地周辺コース)☆

- ・日 時：10月20日(火)
午前9時30分～午後3時
- ・場 所：高知市下知周辺
(自伝4部作ゆかりの地)
- ・定 員：50名
(電話又は文学館受付にて事前に
お申し込みください。)
- ・参加費：**3,500円と実費(電車代)**

他にも木洩れ日コンサートや香南市内の小学生による朗読会、最終日限定のイベントなど多彩な関連企画を用意してお待ちしています。詳細はチラシをご覧ください。

新資料紹介

石原純あて寺田寅彦書簡(大正六年一月一七日付)

前号に引き続き、寺田寅彦の新資料である石原純宛書簡の後半部分をご紹介します。手紙後半からは、寅彦が新旧の物理学に一定の理解を示しつつも決して自信せず、これから物理について独自の考えを持つている様子がわかります。また、結びの部分では友人たちとの交流の一端もうかがえ、寅彦の人間的な魅力も感じられます。(学芸課／永橋楳子)

＊＊＊

今の物理学がもう少し統一すればそんなにも思ひませんが、量子説など、クラシカルの力学との融合がとれず、電子説が凡てを説明し得ぬ處を見るなども根本的新しい展開が伏在して居るのではないかと疑ひます。下らぬ事ですが例へは人間の耳の構造を詳しく調べて見るとどうも其微妙なのに驚嘆しますが此の様な微妙なメカニズムは唯人間が顕微鏡などで見得る範囲だけに止つて例へば原子の構造などは割合に簡単なものと考へ得る理由が何處にあるかと考へます。例へば人間を原子位にしか見得ぬ他のBeingがあつたとして音波に対する人間原子の反応を驗して居たら矢張何かの「方則」などは見つかりましようが。吾人のラビリンスの様なメカニズムの存在は夢想する事も出来ますまい。

マツハはカントの「物自身」を蔑視しました。しかし感覚の対象から感覚によつて得られる知識に限定があるとは信じなかつたでしよう。

少くも小学生はそう信する處が出来ません。吾人が現に今知つて居る物の知識以上にまだ沢山な知識が伏在して居ると考へたいので此点では寧ろカントに同情したくなります。

今日の物理学がある目的にすゝんで居るとすれば其道筋は一筋しかないのか、或は他の軌道航路が可能であるかどうか此れは六かしい問題としても、同じ線路を或は電

車或は汽車で行ける様に異つた「概念」、異つた「解析法」によつて近む事は勿論可能で現にそういう事をやつて居ります。それで今用ゐて居るよりもつとちがつた「概念」や「解析法」の可能は拒み難くはないかと考へます。

此までも直木賞やオール讀物新人賞といった受賞歴のある一力さんですが、今回の受賞は一作品に対してではなく、これまでの優れた作品群、人生の足跡や人間力等々も含めて評価されたものであり、作家としての円熟期における大きな金字塔と言えるでしょう。

長谷川伸と言えば、『関の弥太郎』『国定忠治』『瞼の母・査掛時次郎』など、いわゆる「股旅物」というジャンルを開発し、大衆文芸や演劇の向上などに多大な貢献をされたこと有名な人物です。その長谷川さんが主宰していた文学学校「勉強会」、新鷹会。その門下生には、村上元三、山岡荘八、平岩弓枝、池波正太郎、西村京太郎等々の錚々たるメンバーが名を連ねています。1963(昭和38)年、長谷川さんが永眠されると、その遺徳を慕い遺志を継承するべく、新鷹会(理事長・平岩弓枝)が主催し、長谷川伸賞が設立されました。

横浜市に生まれた長谷川さん、実家が没落し、小学校三年生で中退して船渠(ドック)勤め等に従事、住み込みの使い走りや水撒き人足として働く間に、港に落ちている新聞のルビを読んで漢字を覚えたと言られています。少年時代や青年期の経験が義理人情に生きる市井の人々を題材とした作品に生かされ人気を博しました。

一方、中学三年の5月に故郷・高知を離れ、東京で住み込みで新聞配達をしながら高校を卒業、社会人としても様々な試練を乗り越え、それらが人間の魅力、作品の魅力につながり、時代物の第一人者として歩んでいる山本一力さん。これまでの業績を称え、今後の更なる活躍を期待されて贈られた今回の賞は、一力さんの今後の作家としての道を素晴らしい輝きをもつて一層明るく照らしてくれるようと思われます。

「長谷川伸賞・受賞」に思う

元吉 喜志男

さる5月26日、優れた歴史小説家や演劇、舞台、芸能関係者らに贈られる長谷川伸賞の栄えある第50回目の受賞者に、本県出身の作家・山本一力さんが選ばれました。

これまでも直木賞やオール讀物新人賞といった受賞歴のある一力さんですが、今回の受賞は一作品に対してではなく、これまでの優れた作品群、人生の足跡や人間力等々も含めて評価されたものであり、作家としての円熟期における大

草々

一月廿七日

寺田拝

石原学兄玉机下

川好き海好き——雨村と貢太郎——

猪野 瞳

—寄贈資料から—

田中貢太郎書「安藝十句」 扁額 長野礼三氏寄贈

森下雨村はもつばら川漁だつた。アユを釣りアメゴを釣り、鯉を突きウナギをとつた。隨筆「猿猴川に死す」には仁淀川、新庄川、本川越裏門、物部川がでてくる。そして浦戸湾から国分川をさかのぼつていくハゼも釣つた。國分川を潮時にのぼつていくハゼは拾うようなものだつたというほど豊産だつた。戦争が激しくなつていく時代、東京での作家の名声と家を処分して帰つてからの釣三昧の日々をかいしたものだつた。

田中貢太郎には二口ギ釣りがでてくる。少年時には田んぼや用水池でフナ、ウナギを釣るには頭に入る波を背にする。波をかつぐのである。キス、スミヒキ、チヌなどの小魚がつれた。フグもくる。地曳網を引いた後の網漏れイワシが撒き餌になつていて。

石で貝を碎きそれを撒き餌にして投げこむ。波をかついでくる波に巻きこまれないようにするには頭に入る波を背にする。波をかつぐのである。竹を切りたわめ、浮きもつくり自分に合う竿をつくるもの、畳いっぱいに投網を拡げて編みあげていた川漁師をみたのは、もう二十年ほど前になろうか。川好き海好きが二人の文からは今に伝つてくる。(詩人)

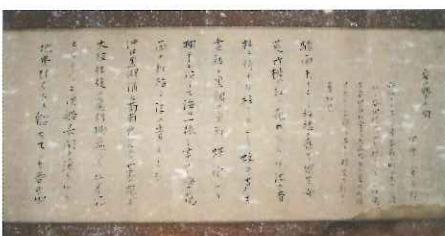
◆仁淀川・鎌井田

土用波になり朝霧が海岸の松並木にかかる頃は、田んぼの子蟹をつかまえてチヌ、タイを釣るものもいた。小学校の休み時間には抜けだしてゴウナを拾つておき、授業が終わると海岸へ走る少年だつた。それだけに大人になつても魚にうるさかつたろう。

作家になつて帰郷した折、カツオについて次のように書いた。「日和下駄の歯のように厚く切つた松魚の刺身にはニンニクをつけて喰うのも土佐の酒徒の悦ぶ所であるが、糠と酒粕で拵えた味噌で松魚のアラを煮たのは土佐独特の料理として天下の酒徒を悦ばすものであるまい」とある。おそらく今、この味と調理法を知るものがどれほどいようか。

二口ギについても、今、浦戸湾に舟を浮かべ優雅に釣つている光景など見かけないが、わが郷里のおもなる慰みのひとつと聞く。「われこの魚の味を口にせざること二十年。久しぶりの帰郷で巣山の近くでは一時間に二、三十四釣れた。船の中で釣つた二口ギを喰べるために小鍋に焜炉を用意した」ともある。獲れたてを舟にゆられながら舟端でより焼いたり煮たり酒をわかしたりの舟遊びであつた。

二口ギ釣りは浦戸湾がきれいだつた戦後も続いていた。年輩者には記憶をもつ人も多かるう。竹を切りたわめ、浮きもつくり自分に合う竿をつくるもの、畳いっぱいに投網を拡げて編みあげていた川漁師をみたのは、もう二十年ほど前になろうか。川好き海好きが二人の文からは今に伝つてくる。(詩人)



- ▼増田徹・寺田寅彦資料 書簡・科学論文別刷・他
- ▼鈴木眞一・宮尾登美子資料 書簡・色紙・写真・他
- ▼山崎述・前田とみ子(宮尾登美子)色紙
- ▼片岡文也・片岡文雄資料 原稿・第9回小山秀雄賞正賞レリーフ他
- ▼横山隆二・横山隆一旧蔵
- 田岡典夫写真他
- ▼小原敏一・大町桂月書軸(大町桂月画賛・下司凍月画)
- ▼森美沢・横山青娥書簡
- ▼白澤涼子・妻鳥季男旧蔵 吉井勇閑連
- 資料他
- ▼中脇初枝・世界の果てのこどもたち中脇初枝著・講談社刊
- ▼松谷みよ子事務所「新版日本の民話1 信濃の民話 濱川拓男・松谷みよ子編
- 未來社刊
- ▼吉本万登賀・歌集ひだまり 吉本万登賀著
- ▼安藤緑彗著刊
- 同行三人 安藤緑彗著刊
- ▼横田晴光・寺田寅彦語録 堀切直人著・論創社刊
- 他

資料受贈報告

受贈報告(平成27年4月~7月)敬称略

英竹桃の紅い花のだらけ波の音
柱に倚れば柱をめぐり蚊の声す
驟雨来るらし稻穂の靡き翅黒女
櫛干に沿うて海に一線を畫せり梅の花

今年ご寄贈いただいた扁額は新聞記者であつた安田稔氏の旧蔵品で、前書きには昭和十五年二月安芸町に来りて發病し安田稔君の介抱を受けて快癒す
安田君は嘗て大正九年の夏大町桂月先生と安芸に来りし時交を訂せし舊知也
と書かれています。『旋風時代』で知られる大正・昭和時代の作家田中貢太郎は昭和15年2月初旬、旅行で安芸を訪れ、宿泊先の小松屋旅館で4度吐血、一時重態に陥りますが、小松屋旅館での1か月にわたる療養で、無事快方に復きました。
扁額に書かれている句は

雨の紅梅に波の音にじむ
沖は黒潮浦は葡萄色のぬめり菜の花よ
大阪往復の飛行機飛べり二月風
とんとんと漁船長間に通りけり
地曳引くあり船たでるあり春の雨

の十句。このうちはじめの四句は既に大正15年刊『貢太郎俳句集』にみえ、大正9年夏に桂月と土佐を訪れた時の作。

※驟雨来るらしは字句の異同あり

貢太郎が高知市へ引き揚げたのは3月11日。「地曳引くあり船たでるあり春の雨」の句の「たでる」とは「船を陸上にひき上げて、船の底板に穴を開ける虫を焼き殺すこと」。海辺の町・安芸の春の風景が浮かんできます。その後の言葉は「なんちやあじやなかつたかねやでした。

常設展「虫がね」シリーズで、変わる常設展示をご紹介！

高知県立文学館では、いつ来ても新しい発見、新しい体験をしていただけるよう、展示入替を行っています。今年度は「自由民権」コーナー・宮崎夢柳、「反骨の大衆文学」コーナー・森下雨村、「現代の作家」コーナー・清岡卓行、「近現代の詩歌」コーナー・北見志保子を新たにご紹介しています。

展示作家紹介 宮崎夢柳

宮崎夢柳は1855年（安政2年）、高知城東の中新町（現・高知市桜井町）生まれの新聞記者、翻訳家、小説家。本名富要（とみやす）。別名芙蓉（ふよう）。高知での記者時代には、自由民権運動家として論説、小説、漢詩で活躍。上京後は、「自由新聞」での連載「仏蘭西革命記 自由の凱歌」をはじめ、西洋の作品を翻案した政治小説を発表、自在な脚色で一世を風靡しました。1860年代の少年期、夢柳は藩校致道館で学び、漢詩文に優れた才能を發揮。坂崎紫瀧や結城凡鳥らと詩文を談じ、藩主山内宗室にその詩才を愛されました。その後、東京に遊学し、英書と漢籍を学びます。

1880年（明治13年）帰高、「高知新聞」の記者となつた夢柳は編集長紫瀧を助け、翌年には、「春色雙樹の花」他の小説を発表。「土陽新聞」（後「高知新聞」）では、安芸郡吉良川村（現・室戸市）で政談演説会を行なった際の道中記「芸郡紀遊」を連載しています。また、来高した岸田俊子（中島湘烟）との漢詩の唱和でも評判となり、岸田が高知を離れる際には「高知新聞」に惜別の詩を載せてています。

1882年（明治15年）上京、前述の「自由の凱歌」やロシア虚無党ものに材を採った「虚無党実伝記」「鬼啾啾」が好評を博します。「自由燈」に連載した「鬼啾啾」は夢柳の文名を高めた代表作で、1885

（明治18年）年に単行本を刊行。しかし、本書が出版条例違反に問われ、夢柳は獄中生活を送ることとなります。

出獄後、一旦帰郷しますが、1888年（明治21年）大阪で「東雲新聞」に「芒の一と叢」や「自由の凱歌」続編を連載。再起を果たした夢柳でしたが、翌年の6月病に臥し、7月23日、同地で34年の短い生涯を閉じました。

今回の展示では、貴重な肉筆資料、夢柳晩年の作とされる漢詩「病中春日」や中島湘烟画賛の紙面や、同紙に挿絵入りで掲載された「仏蘭西太平記 鮮血の花」「鬼啾啾」の場面をパネルで紹介。和漢洋の才を駆使した夢柳の作品の数々をぜひご覧ください。明治維新前後の変動期を生きた宮崎夢柳の展示を通して、先進地である西洋の文物を取り入れながら、近世から近代へと移行していく明治という時代の一面をお伝えできればと思います。（学芸課／小松路代）



▲展示風景



平成27年度 第18回児童生徒文学作品朗読コンクールのお知らせ

◆地区審査(公開)

- 8月14日(金)午前10時 東部会場(田野町ふれあいセンター多目的会議室)
- 8月18日(火)午前10時30分 西部会場(大方あかつき館レクチャーホール)
- 8月21日(金)午前9時 高知会場(文学館1階ホール)

◆県審査(公開) 表彰式・記念講演会があります。

会場:高知県立文学館ホール
日時:11月8日(日)午後1時~

お問い合わせは朗読コンクール担当まで (TEL: 088-822-0231)

おります。

なお、「郷土文学賞」は、第1類の中から選ばれます。

朗読に親しむことで、文学に触れ感性を磨く。

人前で発表するという経験が、積極性を育てる。他人の朗読を聞いて自分とは違う個性に出会う。そして育った郷土への気持ちを表現する。

高知県立文学館では、そんな様々な経験をして頂く機会として、朗読コンクールがお役に立てればと考えております。審査会・公演会は入場無料となっておりますので、高知の子どもたちの日頃の努力の成果を、ぜひ各会場で御覧ください。（学芸課／谷岡真衣）

高知県立文学館では、そんな様々な経験をして頂く機会として、朗読コンクールがお役に立てればと考えております。審査会・公演会は入場無料となっておりますので、高知の子どもたちの日頃の努力の成果を、ぜひ各会場で御覧ください。（学芸課／谷岡真衣）



the bears'school

ジャッキーだいすき!

-くまのがっこう展-

7月11日(土)~9月6日(日)

好評開催中!!

会期中無休

観覧料:500円(常設展含む) 高校生以下無料



©BANDAI

絵本シリーズ「くまのがっこう」は、やさしいおにいちゃんくまの子と、いたずらできかんぼうの女の子ジャッキーがくりひろげる、なんでもないけれどあつたかい1日のおはなしです。あいはらひろゆきさんのリズミカルな文と、あだちなみさんの愛らしいイラストは、若い女性と子どもたちを中心にお幅広い世代に愛されており、現在14冊刊行、210万部を超えるベストセラーとなっています。

ジャッキーはいたずらできかんぼうで、とても元気な女の子ですが、たまに失敗をして「あーん」と泣きだすこともあります。けれども、いつも温かく見守ってくれるおにいちゃんたちが、最後はそっとジャッキーを助けてくれるのであります。



▲大人気のぬりえコーナー

ジャッキーたちの物語を読んでいると、「普段は見過ぎ」としている何気ない日常が、実はとても大切で幸せなことなのだということに気づきます。お話を惹かれて何度も何度も絵本を繰っていると、絵本の隅に描かれているキャラクターたちのちいさな物語に気づいたりするなど、何度も読んでも新しい発見があり、大人でも楽しめる絵本です。

そんな心あたまる「くまのがっこう」の世界を再現したのが、高知県立文学館の企画展「ジャッキーだいすき! —くまのがっこう展—」です。

風船がいっぱいある、わくわくする入口を抜けると、「くまのがっこう」が再現された「コーナー」や、ジャッキーのぬり絵ができるコーナー、ジャッキーのはつこい相手・ディビットと一緒に写真が撮れるコーナーなど、ジャッキーの「だいすき!」がたくさんつまつた会場となっています。「がんばること」をカードに書くという参加型の展示もあり、来て下さったお客様が自然に笑顔になつて帰られるのを見て、スタッフたちもとても嬉しい気持ちになります。

企画展のオープニングでは、高知市にある、くるみ幼稚園の園児さんが元気よく合奏してくれ、ジャッキーも駆けつけてくれてにぎやかな開幕となりました。素焼きに色付けして世界で一つのジャッキー&ルルロロを作るドールペイントやクイズ、ひろめ市場や県立図書館とコラボしたスタンプラリーなど、関連企画も盛りだくさんです。かわいいまのがっこうグッズもたくさんご用意しています！

絵本のように何度も見ても新しい発見がある企画展となっています。9月6日(日)まで開催しておりますので、ぜひお越しください！

(学芸課／永橋禎子)



▲オープニングのくるみ幼稚園さん合奏

企画展 案内

ジャッキーだいすき！－くまのがっこう展－

7月11日(土)～9月6日(日) 場所:企画展示室 観覧料:500円

絵本シリーズ「くまのがっこう」は、やさしいおにいちゃんくまの子と、いたずらできかんぽうな女の子ジャッキーがくりひろげるお話です。くまのかたちの「だいすき！」がたくさんつまった会場で、ジャッキーと心あたたまる一日をお過ごしください。

詳細は7ページをご覧ください。



©BANDAI

ありがとう。宮尾登美子さん～88年の生涯を偲んで～

9月19日(土)～11月23日(月・祝) 場所:企画展示室 観覧料:500円

2014(平成26)年12月30日に88歳で逝去された作家宮尾登美子さんの追悼展。日本の伝統文化や歴史上の女性たちの生き様やその生涯をテーマに数々の名作を執筆され、多くの人々に感動と勇気を与えてくださった宮尾登美子さんの人と文学について、資料や写真などを通してご紹介します。

宮尾登美子展のご案内をしています！ 詳細は表紙・2・3ページをご覧ください。



写真提供／世界文化社

第18回 児童生徒文学作品朗読コンクール

当館では、朗読を通して文学に親しむ子どもたちを育てたいと願い、毎年、朗読コンクールを開催しています。子どもたちが一生懸命練習した朗読を聞きに、ぜひ、会場へお越しください。



◆地区審査(公開)

- ☆8月14日(金)午前10時 東部会場(田野町ふれあいセンター多目的会議室)
- ☆8月18日(火)午前10時30分 西部会場(大方あかつき館レクチャーホール)
- ☆8月21日(金)午前9時 高知会場(文学館1階ホール)

応募 問い合わせ先

〒781-8123

(公財)高知県文化財団内
高知市高須三五三一
TEL 088-866-8013

ご記入いただき個人情報は、運営上の管理及び本人への連絡の用途に限り、利用いたします。ただし、入選作品については、在住市町村名及びお名前・年齢を公表します。

- ・応募作品は返却しません
- ・ご記入いただいた個人情報は、運営上の管理及び本人への連絡の用途に限り、利用いたします。
- ・短歌、俳句、川柳は通常ハガキで応募
- ・原稿用紙の場合は、1面に1文字を記入
- ・氏名(ペンネームがあれば併記)、現住所、電話番号、年齢、性別を明記
- ・全部門とも自由題
- ・応募者は高知県在住者
- ・文字は楷書で読みやすく表記

- 【注意事項】
- ・作品は未発表のもの
- ・締切日
- ・平成27年9月30日(当日消印有効)

・各部門ごとに文芸賞と文芸奨励賞(賞状と副賞)
その他、佳作が選出される場合もあります。

- | 詩 | 短歌 | 俳句 | 川柳 | 短歌 |
|--------------------|--------|--------|--------|--------|
| 一人一編400字詰原稿用紙で2枚以内 | 一人3首以内 | 一人5句以内 | 一人5句以内 | 一人5句以内 |

平成27年度高知県芸術祭では、「第44回文芸賞」の作品を募集します。

高知県芸術祭 文芸賞作品募集!

利用案内

- 開館時間 午前9時～午後5時(入館は、午後4時半まで)
休館日 年末年始(12月27日～1月1日)を除き、無休。
※その他メンテナンス等で臨時休館することもあります。
観覧料 一般360円 企画展はそれぞれ異なります。
20人以上の団体は2割引。高校生以下無料、
高知県・高知市長寿手帳、身体障害者手帳、療育手帳、
精神障害者保健福祉手帳、戦傷病者手帳および被爆者
健康手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料です。
駐車場 なし。ただし近辺に有料駐車場があります。
附帯設備 ホール、ミュージアムショップ、こどものぶんがく室、
茶室「慶雲庵」
貸出施設 企画展示室、ホール、茶室

E-mail : bungaku@kochi-bunkazaidan.or.jp

<http://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/~bungaku/>

交通のご案内



- 高知龍馬空港より空港連絡バスく県庁前行
「公園通り」下車、北へ徒歩5分
- JR高知駅下車、徒歩20分(または連絡バス・路面電車を利用)
- 路面電車「高知城前」下車、北へ徒歩5分
- バス停「公園通り」下車、北へ徒歩5分

高知県立
文学館

〒780-0850
高知市丸ノ内1丁目1-20
電話 088-822-0231
FAX 088-871-7857